

「節目を尊ぶ、人生は旅」

世界との往き来難かる世はつづき
 窓開く日を偏に願ふ
 令和四年敬会始 御製

コロナ禍が収束したその先に、今大きく落ち込んで
 いる世界との人々の往来が再び盛んになる日の訪れ
 を願われるお気持ちをお詠みになった御製です。

松榮山報



あけまして
おめでとうございます

御創建百五十年終戦八十年記念事業ご奉賛のお願い

〔玉垣親柱〕ご奉賛三十万円の方

大分市		大分市	
護國	護國	株式会社護國建設	株式会社護國建設
太郎	さくら	〔玉垣〕ご奉賛十万円の方	〔玉垣〕ご奉賛十万円の方

〈刻銘例〉

当神社には明治維新の勤王の志士五柱をはじめ大分県ゆかりの四四四八柱の御祭神がお鎮まりです。

来る令和七年は明治八年の御創建から数えて百五十年の年を迎え、終戦八十年の年とも相成ります。この大きな節目の年に当たり「御創建百五十年終戦八十年記念事業」を計画いたしました。

終戦から七十有余年を数える昨今、当神社を取り巻く環境は以前とは大きく変わってまいりました。しかし、世の状況がいかに変わろうとも今日の日本の平和と繁栄の礎を築かれた御祭神の慰霊と顕彰は次の時代でも必ず果たしてまいります。その将来を見据えさまざまな世代の方々に心地よく安らいでお参りいただける境内を整えてゆく所存です。

何卒本事業の趣旨にご賛同の上、お力添えを賜りますようお願いを申し上げます。次第です。

令和五年一月吉日



①参拝者休憩所 完成予想図



②参道石畳・玉垣 完成予想図

一、記念事業の概要

- ①参拝者休憩所 増築
- ②参道石畳・玉垣設置

二、御奉賛要項

- 〔募金目標〕一億円
- 〔奉賛金〕
- 個人 一口五千円から
- 法人・団体 一口一万円から

〔募材期間〕

令和四年四月一日～令和七年三月三十一日まで

〔お申し込み方法〕

- 郵便局ご利用
 - ご持参
 - 銀行ご利用
- 詳しくは神社までお問い合わせください。
 電話〇九七・五五八・三〇九六

《永代の記念に》 十万円以上ご奉賛の方は、ご芳名を参道両脇の玉垣に刻銘します。



令和五年 年頭のご挨拶



大分県護國神社宮司 八坂 秀史

令和五年新春にあたり皇室の弥栄と御霊安らかならんことを心から祈念します。年が改まっても世界平和への祈り、隣の国々の蜜行をはね返す気概と策、悪疫の予防は持続いたしましょう。

令和五年は十干が十番目最後の「癸」(みつのと)、十二支は四番目の「卯」(う)です。干支は癸卯(みつのと・う)です。「癸」(みつのと)

は手偏が付くと一揆の「揆」となります。「一揆」は目的を果たすために心を合わせて行動すること。「はかる」という意味があります。癸は筋道を立てて考え取り計らうことを表します。「卯」(う)は、もともと、「いばら・かや」という文字であり、根が広がり草木が茂り地面を覆う繁茂の勢いを表します。良い意味では繁栄ですが、一方では物事が複雑に絡み合い、動きがとれなくなる面もあります。「癸卯」は、万事筋道を立てて進めて行けば繁栄しますが、道を誤ると混乱、挫折し予期せぬことがはびこることを表しているとも言えます。

よ誇らしくあれと仰った時の総理大臣の言葉が思い起こされます。「令和」に「癸卯」の意味を重ね、社会と自分により美しい花が咲くよう次の五年の計を立てましょう。

当神社はあと二年で御創建百五十年を迎えます。ただ今進めている「御創建百五十年終戦八十年記念事業」は、ご神前に多くの方々より心地よくご参拝できる境内を目指しています。将来にわたって、御霊の大前で心安らかに祈念できる神苑造りの一環です。すでにたくさんの方々からご奉賛を賜り誠に感謝に堪えません。厚く御礼申し上げる次第です。この四月からは二年目の事業年度に入りますが、まだまだ道半ばです。どうぞ今年もお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

御霊を尊び御霊から見守られて幸多いひととせとなりませうお祈り申し上げます。

節目を尊ぶ、人生は旅

いのちの賑わい 社頭

令和五年



夜の帳(とぼり)がすつかりと下りた深夜。大分県総鎮守の護國神社の本殿へと向かう大勢の人々の姿。そこには人々の熱気と高揚と緊張、そして不思議なくらい静謐な雰囲気がありました。その厳かな静けさは御霊たちの大きな懐に包まれているようにも思えました。

日付が変わる直前、来たる年に安寧の祈りを込めて吹奏楽「国の鎮め」を奏でました。初めての試みでしたが、その荘重な調べに参道を埋めた参拝者は耳を傾けてくださいました。午前0時、初詣でに訪れた老若男女の皆さんが一斉に本殿へと進み、心を込めて手を合わせ、一心に祈る年の初めの一番最初のこの風景こそ、日本人の品格の表れであるといつもながら感じています。神様に真摯に向き合い、そして一年の初めの一刻を大切にしたいと、そこに自ずと現れる礼儀を伴った美しい所作。まさにこの初詣でこそ、古代から神様を敬う日本人たる民族と、神様とが神人一体になれる唯一の時ではないかと思える崇高な場面ではないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症対策で、皆さんが自粛された一昨年はまことに寂しい初詣での様子でした。新年をお祝いするような華やぎと穏やかな雰囲気ではありませんでした。あの時に比べて元に戻りつつある有り難さや安堵感はあるものの、八度目の感染拡大が訪れ人々の暮らしが窮屈に戻らないことをお祈りするばかりです。日本の国内外を問わずさまざまな憂いごとの多い近年と、そしてさまざまに影響を及ぼす気候変動のなかにある私たち。今がまさに試練の時代、間違いを正し間違いを起こさぬようしっかりとした判断をする大切な時であると思えます。

収束の兆しの見えない新型コロナウイルス。善悪の判断を麻痺させるネット社会の拡大と、それに伴って意に反するような著しい拡散が多く見られた昨年でした。そこには文明と文化の齟齬(そこ)がさまざまなことを感じました。隣国による言われのない所業の数々、安倍元総理が凶弾に斃れ、エリザベス女王が崩御されました。そしてロシアによるウクライナ侵略から始まった昨年でもありました。プーチン大統領は核兵器の使用も辞さないと強硬姿勢を示しています。日本に落とされた原子爆弾が人類にとつて最初で最後の狂気であつてもらいたいと心から願うのは、日本が唯一の被爆国であるからです。あのような大きな過ちを犯した人類が、過去を顧みずまた再び罪を犯すのだろうかと思うと、心が痛んでいるような為政者に対して、世界中がごぞつて阻止をせねばならない正念場の今年になるかもしれません。

全世界の人々が等しく幸せであつてもらいたという願いは、多様性を良しとする現代社会において無理かもしれませんが、せめて「生きていることの有り難さ」を、実感できるような今年一年であつてほしいと念じてやみません。

世界中でただおひとり、誰もが畏敬の念を抱く「エンペラー」と呼ばれる天皇陛下がいらっしゃる日本。常に国民に目を向け、心を寄せてくださっている両陛下を頂に、此処に生きる我々日本人はさまざまにおいて、ひとつも怯むことなく正々堂々と正中を歩まねばなりません。これからも末永くまっすぐと正しい道を歩んでいくことが続くようにとの思いと願いを新たにした令和五年の幕開けになりました。

福みくじ

(元日2,000本限定)

特賞「煌(きらめき)」のバカラクリスタルガラス製干支(卯)の置物を見事に引き当てたのは、ご家族で初詣でにお越しの大分市在住の田中桃華さんでした。



みつば奉納 有限会社佐藤園芸様
七草奉納 坂本勝信様

一月七日は七草粥。巫女さんからの振る舞いに長蛇の列が。悪疫退散を願うばかりです。

新年に向けて師走の点描



十二月に入ると同時に神社にはわかにかに多忙を極めていきます。初詣でにお越しの参拝者が授かる破魔矢など縁起物を仕女たちが手際よく整えていく日々が続く様子に、毎年このとながら一年が経つ早さをしみじみと思えます。そして無事にまた年末の諸行事を迎えることができる有り難さも心に染みます。

卯（うさぎ）。内田画伯によるうさぎの絵は参拝者を大きく優しく包み込むようなふくよかさがありません。この干支の大絵馬の除幕式が、神社にとっても皆さんにとっても、歳末のひと月に向かう心意気のスタートとなります。

三日には大熊手と大破魔矢の設置が行われました。いまだ収束の気配が見られない新型コロナウイルスの感染。感染者数の増減はまるで潮の満ち引きのようでもあり、際限なく繰り返すこの波長の止めようが見つけられないまますでに三年になろうとしています。そのようなやせない思いのなかで、まるで今の世のさま

ざまを乗せて天に向かつて勢いよく放たれるような大破魔矢の姿。悪しきことは捨て去り、良きことの取りこぼしのないように福を掻き寄せる大熊手。ふたつの大きな縁起物は心のよりどころにもなり、そして数倍ものご利益をいただけるようなパワーそのものにもなります。



12/31 12/18

冬至の大祓式



古くから一陽の嘉節と言われている冬至。この日を境に徐々に陽が長くなり、命あるすべての万物が春へと誘われていくような、和やかさと力強さを「冬至」という季節の言葉から感じることが出来ます。冬の本番はまだまだこれからという身構えの日々のなかでありながらも、晴れやかなお正月も控えて、どこかしら季節を先取れる喜びを迎えるのが冬至の日です。

十二月十八日、冬至の大祓式が大勢の皆さんのご参集のもと執り行われました。時折雪が舞う師走らしい冬空、厳しい寒さのなかではありましたが、浄火を用いた火滅の神事に多くの方々のご参列をいただきました。炎に包まれ一瞬にして灰燼と帰す紙に比べて、長く火中に残り皆さんの思いがゆっくりと届くようにと、今回より炎に入れる人形祓串（ひとがたはらへぐし）を木札に変え頒布いたしました。赤々とした浄火、炎の勢いは私たちが持つ力強い命の姿であり、皆さんが託す真心がこもった願いごとの大きさでもあります。

二十五日にはいよいよ御霊たちが鎮まる、もつとも神聖な本殿などのお清めとお正月のしつらいと整い。一年間、本殿などに風雨がもたらしたさまざまな塵などを、忌み竹で清め払い御煤払いが神職仕女の手によつて執り行われ、同時に隊友会関係者と東原老人会の皆さんによる本殿に掛かる大注連縄の奉製と掛け替えも行われました。

神事終了後には、邪気を払い無病息災を願う柚子湯用として、冬至柚子をご参拝の皆さんにお頒ちしました。常若の葉を茂らせる柚子は、不老長寿として尊ばれている橘（みかん）の実を彷彿とさせてくれます。柚子ではありませんが、京都御所の紫宸殿前では右

冬至南瓜奉納 丸一青果株式会社様
冬至柚子奉納 一万田範彦様

令和5年 癸卯 星祭早見表

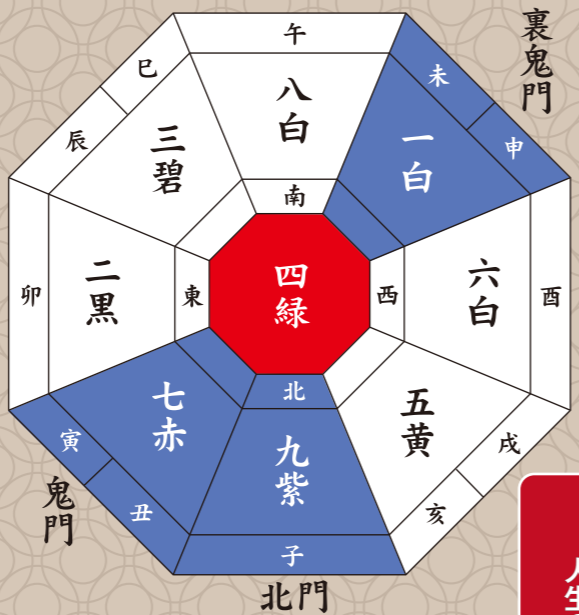
人は生年月日により、九つの星「九星」(①一白水星から⑨九紫火星)に分けられ、運勢を考える基本となっています。

厄年とは異なり自身の星が中央(八方塞がり)・北(北門)・東北(鬼門)・南西(裏鬼門)に当たる年は運気が下がりやすく、災いが身に降りかかりやすくなるといわれています。今年の星回りが悪い方は星祭をして、1年の除災招福をお祈り致しましょう。

星祭

※数え年

八方塞がり	鬼門	北門	裏鬼門
四緑木星	七赤金星	九紫火星	一白水星
昭和8年生 91歳	昭和5年生 94歳	昭和3年生 96歳	昭和2年生 97歳
昭和17年生 82歳	昭和14年生 85歳	昭和12年生 87歳	昭和11年生 88歳
昭和26年生 73歳	昭和23年生 76歳	昭和21年生 78歳	昭和20年生 79歳
昭和35年生 64歳	昭和32年生 67歳	昭和30年生 69歳	昭和29年生 70歳
昭和44年生 55歳	昭和41年生 58歳	昭和39年生 60歳	昭和38年生 61歳
昭和53年生 46歳	昭和50年生 49歳	昭和48年生 51歳	昭和47年生 52歳
昭和62年生 37歳	昭和59年生 40歳	昭和57年生 42歳	昭和56年生 43歳
平成8年生 28歳	平成5年生 31歳	平成3年生 33歳	平成2年生 34歳
平成17年生 19歳	平成14年生 22歳	平成12年生 24歳	平成11年生 25歳
平成26年生 10歳	平成23年生 13歳	平成21年生 15歳	平成20年生 16歳
令和5年生 1歳	令和2年生 4歳	平成30年生 6歳	平成29年生 7歳



成人式 入学式「年祝」

人生の節目にあなたやご家族のお名前を境内に残しませんか

(裏面の記念事業をご覧ください)

年祝

	数え年	生まれ年	干支
十三詣	13	平成23年	卯(うさぎ)
小厄(九越)	49	昭和50年	卯(うさぎ)
還暦	61	昭和38年	卯(うさぎ)
古希	70	昭和29年	午(うま)
喜寿	77	昭和22年	亥(いのしし)
傘寿	80	昭和19年	申(さる)
米寿	88	昭和11年	子(ねずみ)
卒寿	90	昭和9年	戌(いぬ)
白寿	99	大正14年	丑(うし)
百寿	100	大正13年	子(ねずみ)

令和5年 癸卯 年詣早見表

	性別	数え年	生まれ年
前厄	女	18	平成18年
		32	平成4年
	男	24	平成12年
		41	昭和58年
本厄	女	19	平成17年
		33	平成3年
	男	25	平成11年
		42	昭和57年
後厄	女	20	平成16年
		34	平成2年
	男	26	平成10年
		43	昭和56年

節目を尊ぶ、人生は旅



昨年十二月九日、大分商工会議所の部会役員委嘱状交付式に宮司が招かれました。当日はレンブラントホテル大分で「大分縣護國神社の歴史と取り組み」御創建百五十年・終戦八十周年について」と題して講演を行いました。約百五十名の議員の方々に全国の神社数やその種類、招魂社から護國神社への変遷や戦後の護國神社、マツカサ一司司令官の戦争観。そして当社社の今後の展望などをお伝えしました。参加された議員はどなたも大分市の商工会を牽引される方々ばかりですが、皆さん熱心に耳を傾けてくださいました。



権禰宜 海野 眞

年末に最終回を迎えたNHK大河ドラマ『鎌倉殿の十三人』は史実とフィクションのバランスが良くとれたドラマで大変面白く視聴していた。私は学生時代から日本史が大好きなので、NHK大河ドラマを毎回大変興味深く見ていた。主人公の北条義時がライバルの武士を謀殺しながら父の北条時政や姉の北条政子とともに権力を掌握していく過程を脚本家三谷幸喜氏の手によって見事に描かれていた。私は、「史実が良くてフィクションが悪い」というようなことは思わない。現実の厳しく悲しく暗い史実が結果としてあるが故に、歴史に「もし」はないが、史実をベースとした上に優しい願いをフィクションとして楽しむのは大いに結構であり、私たちの想像力をかきたててくれる。特に源実朝には甥の公暁に

暗殺されるという悲しい結末が待っているとは知りながら「もし」生きていたら、「もし」暗殺者の公暁が思い留めてくれればと、叶わぬとは思いつながらそのようなと思う。実朝は父にして偉大な創業者とも言える源頼朝の次男に生まれた。しかし七歳の時、父頼朝が突然の事故で亡くなってしまった。父頼朝亡き後、尼將軍として幕政に参与した母北条政子は、叔父北条義時とともに権力を掌握していく。兄頼朝は將軍として道半ばで出家させられ伊豆修善寺に幽閉後、北条氏の手で暗殺される。また、幕府の重職所別当として実朝を側で支えた和田義盛も、北条義時の謀計で討たれる。

次々と身内や親しい人が殺され亡くなる中で、母の北条政子と叔父の北条義時が幕府の実権を握っていった。そんな中唯一、実朝という名を授け右大臣への官位昇進の後押しをした後鳥羽上皇だけが和歌を通じて実朝を心に掛けていた。後鳥羽院政の最盛期京都では王朝文化が花開いていた。実朝の心中を察すると、將軍として武士としての生きづらさや無力感があったように思われる。右大臣として、朝廷そのものである後鳥羽上皇に仕えていこうとする実朝の現実逃避にも似た思いが想像できる。一首が、実朝の歌集「金槐和歌集」に載っている。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも(後鳥羽上皇へ背く心など、私実朝には絶対にありません)頼朝から將軍位を奪い、命を奪ったのが実朝であると信じた甥の公暁が、「もし」憎しみも將軍位への思いも断ち切った僧侶として生涯を過ごしていけば、と思うと本当に悲しくなる。身内同士で殺し合うという大変悲しい最後である。実朝が右大臣拝賀の御札に鶴岡八幡宮へ参詣をした後、大雪の降り積もる石段を下った時、頭巾を着けた公暁が飛び出し、「ヤノカタキハカクウツモノ」と叫びながら、実朝の頭部に太刀で斬り付けた。公暁は倒れた実朝の首を刎ねて、それを手にしたまま走り去った。「親の敵」と叫んだ時、実朝は賊の正体は公暁なのだ知ったのではないだろうか。今まさに討たれようとした時、実朝に去来したものは何であったのだろうか。フィクションならば良いが、史実なら悲しい。三谷幸喜氏は実朝が襲われた時に反撃できる